

酒ばかり飲んでゐる。終電もとつくに過ぎていて、帰りはタクシーになる。

多摩川を越えて神奈川の登戸になると、我が家である。登戸は、江戸へ登る河口からの地名だそうである。江戸も、入江の戸口が地名になったと、なにか

いい。

多分、このタイプの人は多いのではないか。ライバルと別れて、どつと緊張感がほぐれる時である。男は、どこかでだれもがライバルである。女はライバルともうまくやって、もっと巧みに生きる。家内も「ただいま」

のである。多摩川を渡れば小市民。家の遠くてタクシーを降りて、ひっそりと歩いて我が家に帰った。よく時間も金も体力も続いたものである。「あの金をためていけば」。だれもが繰り返す繰言である。

文明開化の明治時代、相撲取りのちよんまげを残すことを決めたのは大久保利通である。大久保利通は伝統を重んじる文化人であった。

わたしの世界に「運、鈍、根」という言葉がある。もう、若い

演劇人は使わない言葉かもしれない。演劇で成功するにはみつ

つの要素がなければいけないそ

うだ。ひとつは運である。運不

運の運である。「あいつは運が

よかった」とうらやむ人がいる。

うらやむ人は、その人がどれほ

どの努力をした結果かを知らな

い。ふたつめの鈍は鈍感の鈍で

ある。人はあまり敏感ではないけ

ないのだそうだ。

# 川を渡れば小市民

で読んだ。家に着くと、開口一番「ああ、腹減った。なにかないか」である。家内もたまった

の声は、ほっとする瞬間なのかもしれない。ほっとして嫌みのひとつもいなくなる。

昔は梯子で酒を飲んでい

た。どこで晩餐会があつても新

宿のいきつけの小料理屋でい

る。西郷隆盛が国といえは薩摩

である。これが西郷さんの人気

もんではない。「食事会ではな

かっただですか」と嫌みのひとつもいなくなるのはわかる。

しかし、このお茶漬の味がな

ばい、下北沢で2、3軒、そしてまたタクシーで多摩川を渡るの秘密かもしれない。しかし、

わたしのご郷の政治家も、お

くんちで回る家の料理はすべて

たいらげると聞いたことがある。

市が9日にあるからおくんな

ちなのか。「お九日」と書くの

(松浦市出身)